

# 京師帝國大學經濟學會

# 經濟論叢

第二十四卷 第一號

大正六年一月一日發行

租稅の目的と實體 . . . . . 教授 法學博士 神戶 正雄

マルクスの社會的意識形態について . . . . . 教授 法學博士 河上 肇

土地の非資本的性質に就て . . . . . 教授 法學博士 河田 嗣郎

徳川時代の農民逃散 . . . . . 教授 經濟學士 黒 正 巖

經濟學の根柢と公益的精神に就て . . . . . 助教授 法學士 石川 興二

露西亞の産業組合運動 . . . . . 助教授 經濟學士 八木芳之助

フイジオの勞賃論と「純收入」 . . . . . 講師 經濟學士 森 耕二郎

日支通商航海條約改正について . . . . . 教授 法學博士 末廣 重雄

國庫預金制度と兌換券發行高との關係 . . . . . 助教授 法學士 沙見 三郎

武士階級の窮乏 . . . . . 教授 經濟學博士 本庄榮治郎

家族統計概論 . . . . . 教授 法學博士 財部 靜治

海運勞務の提供に要する原費 . . . . . 教授 經濟學博士 小島 昌太郎

琉球と慶長役 . . . . . 教授 法學博士 山本美越乃

## 再びマルクスの社會的意識形態について

(かねて福本和夫氏の批評に答ふ)

河 上 肇

私は昨年一月發行の本誌に『マルクスの謂ゆる社會的意識形態について』なる一文を公にしたが、茲に重ねて同じ問題を取扱ふ所以は、これによつて前論の不備を補正し、なほ舊稿に對する福本和夫氏の批評に答ふところあらんがためである。

私の問題とするところは、マルクスがその唯物史觀の公式の冒頭において、『一定の社會的意識形態』と言つてゐるのは、何を指すがといふことである。廣く知られてゐるやうに、その冒頭の一句は次の如くである。

『人類は、彼等の生活の社會的生産において、一定の、必然的の、彼等の意志から獨立した關係を、すなはち彼等の物質的生産力の一定の發展階級に適應するところの生産關係を、與へられたものとして受取る。これら生産關係の總和は、その上に一の法律的および政治的の上層建築が立つところの、且つそれには一定の社會的意識形態が適應するところの、現實の土臺たる、社會の

經濟的構造を形成する。茲に謂ふところの『社會の經濟的構造』に適應するところの『一定の社會的意識形態』とは何か？それが私の主たる問題である。

それについて、私は嘗て次の如く述べた。

『私の見るところによれば、社會的意識形態の或るものは、(私は假にその或るものを經濟的意識形態と名づける)、現實の土臺たる社會の經濟的構造と分離し得べからざる連絡を有つ。それは土臺のなかに織り込まれてゐる。この土臺の上に、先づ法律のおよび政治的上層建築が立ち、更にその上に、第二の上層建築として——従つて土臺からは可なり懸け離れた空中に——經濟的意識形態が聳えてゐるわけではない。……かくて私の見るところによれば、現實の土臺たる社會の經濟的構造の研究は、同時に、社會的意識形態の或る主なるもの(すなはち經濟的意識形態)の研究となる。前者の研究は即ち後者の研究である。』だから、『私の見るところによれば、『經濟學批判』および『資本論』の兩書とも、或る意味においては全然、資本家的社會の經濟的(新たにこの三字を補ふ)意識形態の研究から成る。』私はこれだけのことを明かにせんために、前掲の舊稿を公にしたのであるが、それにはたとひ叙述や説明や理解やの不十分な點があつたにしても、大體の考自體は決して間違つてはゐない。今も猶ほ考へてゐる。そこで茲には、舊稿で述べたのとは違つた方面から、重ねて同じことを説明して見やうと思ふ。

## 一、人間の社會的存在と意識

マルクスの經濟學批判の現實の出發點 (der wirkliche Ausgangspunkt) となつてゐるものは、いふまでもなく das Konkrete たる現實の社會——この現實の社會についての直觀および表象 (die Anschauung und die Vorstellung) である。そのつゞは、『經濟學批判序説』においてマルクスが彼れ自身の方法を説明せる際に、Im Denken erscheint es (das Konkrete) als Prozess der Zusammenhang, als Resultat, nicht als Ausgangspunkt, obgleich es der wirkliche Ausgangspunkt und daher auch der Ausgangspunkt der Anschauung und der Vorstellung ist (思惟においては、具體物は、總括の過程として、結果として現はれ、出發點として現ははしない、尤も具體物は、現實の出發點であり、従つてまた直觀と表象との出發點ではあるが) といへること、或はまた、思惟において再生産せらるゝ具體物を die Verarbeitung von Anschauung und Vorstellung in Begriffen (直觀および表象を概念に造り直したものと) といへること、その他、彼れの方法全體の上から、疑ふの餘地はない。それは正に福本和夫氏が、日本においては始めて、『下向運動』上「向運動」なる言葉により、しきりに力説されたところであり、私自身は氏の斯かる説明によつて啓發されたところが少くない。しかるに、マルクスの方法論の斯かる把握から必然に生ずる論結

3) Kritik, Einleitung, S. XXXVI.

4) 同上, S. XXXVII.

5) 例へば『經濟學批判の方法論』17頁以下を見よ。

が、——私にはさう思はれるものが、——不思議にも福本氏によつて甚しく排撃される。そこに氏の根本的誤謬が存するか、それとも私自身の根本的無理解が横たはるか、私は順次その點を明確にすることに努力するであらう。

すでに述べたやうに、マルクスによつて其の經濟學批判の現實の出發點 (der wirkliche Ausgangspunkt) とされるものは、表象された具體物 (das vorgestellte Konkrete) であり、全體としての一の混沌たる表象 (eine chaotische Vorstellung eines Ganzen) である。この混沌たる表象、それが vorwissenschaftlich な意識 (すなはち常識 ordinaré Vorstellung) であり、それはまた、そのまづ、常識經濟學——俗流經濟學における意識形態でもある。マルクス自身の言葉によれば、die abgedroschenen und selbstgefälliger Vorstellungen der bürgerlichen Produktionsagenten von ihrer eigenen besten Welt zu systematisieren, pedantisieren und als ewige Wahrheiten zu proklamieren が、<sup>6)</sup> 或は die Vorstellungen der in den bürgerlichen Produktionsverhältnissen befangenen Agenten dieser Produktion doktrinar zu verdolmetschen, zu systematisieren und zu apologetisieren が、<sup>7)</sup> 俗流經濟學の仕事だからである。これを異り、マルクスの經濟學批判は、die Verarbeitung von Anschauung und Vorstellung である。しかし、<sup>6)</sup> <sup>7)</sup> に異同があるか？ 先づ Vorstellung そのものを與へられたる材料とする點においては、二者の間に何等の相違もない。ただ

6) Kapital, I, (カウツキー版), S.45.

7) 同上, III, 2, S.352.

それらの *ordinaire Vorstellung* は、事物の現象形態の直接の生産物であり、さうして其れはしばしば事物の本質を逆に表現してゐるがゆへに、それらの *Vorstellung* を *Begriff* に *verarbeiten* し、なせ事物の *Wesen* が斯かる逆な *Erscheinungsform* において現はれるかを、すべての *Vermittlungen* において説明することが、真に科學的な方法であり、やがてマルクスの經濟學批判の方法であり、そこに俗流經濟學とマルクス經濟學との本質的差異が横たはるのである。だから、マルクス自身も、*alle Wissenschaft wäre überflüssig, wenn die Erscheinungsform und das Wesen der Dinge unmittelbar zusammenfielen* (もし事物の本質と現象形態とが直接に一致してゐるならば、すべての科學は贅物であらう)、と言つてゐるのである。

この關係をさへ明白にしてゐるならば、マルクスの經濟學批判が資本家社會の意識形態の批判であるといふことは、殆ど一の同義反復に等しいのである。分り易く言へば、それは常識に對する一の科學的批判に外ならない。もつとも、その常識、その意識形態——マルクスの謂ふところの *ordinaire Vorstellung* または *Bürgervorstellung*——は、決して空に成立してゐるのではない。それは必ずその *die reale Basis* とその *Produktionsverhältnisse* に *entsprechen* して成立してゐる。だから資本家社會に成立する經濟的意識形態の科學的考察は、すなはち資本家社會における諸生産關係の解剖とならざるを得ぬのである。今マルクスの見るところによれば、これら資本家



のもとに暴露される。

さうしてそれは、畢竟するに、『一定の社會的意識形態』(この場合は、一定の經濟的意識形態)が、いつでも『現實の土臺たる、社會の經濟的構造』に entsprechen して成立してゐることの、論證に外ならぬ。だからマルクスはいふ、『勞働生産物を商品に刻印づけるところの、従つて商品流通に前提されてゐるところの、諸形態』、例へば商品形態、貨幣形態等、『この種の諸形態は、正に die Kategorien der bürgerlichen Oekonomie を形成する。それは、商品生産といふ此の歴史的に規定された社會的生産方法の生産諸關係に對する gesellschaftlich gültige, also objektive Gedankenformen (社會的に妥當な、すなはち客觀的な思维形態)である』<sup>13)</sup>と。茲にマルクスが『社會的に妥當な、すなはち客觀的な思维形態』といへるところの經濟的意識形態が、とりも直さず、唯物史觀の公式において、生産諸關係の總和たる社會の reale Basis に entsprechen するところの bestimmte gesellschaftliche Bewusstseinsformen とするものゝ適例である。

Deutsche Ideologie には、この經濟的意識形態について、更に明瞭に、次の如く記述されてゐる。『觀念の、表象の意識の生産は ist zunächst unmittelbar verflochten in die materielle Tätigkeit und den materiellen Verkehr der Menschen, Sprache des wirklichen Lebens. (先づ人間の物質的行爲と物質的交通とのうちに、現實生活の言葉のうちに、直接に織り込まれてゐる)』。

13) Kapital, Nachwort, S.XLVII.

13) Kapital, I, S.39.

人間の表象、思惟、精神的交通は *erscheinen hier noch als direkter Ausfluss ihres materiellen Verhaltens* (この下では、まだ彼等の物質的行動の直接の流出物として現はれる)<sup>14)</sup>。私が昨年の正月、前掲の拙稿において、経済的意識形態は「現實の土臺たる社會の經濟的構造と分離し得べからざる連絡を有つ、それは土臺のなかに織り込まれてゐる」と言つた時、私は批評家の冷笑を買うたに過ぎなかつたが、その後 *Deutsche Ideologie* が始めて世に公にされた時、私はそこに、私の使つた「織り込まれてゐる」といふのと同じやうな意味の言葉 *ist unmittelbar verflochten in...* を發見して、みづから微笑を禁じ得なかつた。經濟上の意識形態——それはマルクスが他の場所で *das Bewusstsein der bestehenden Praxis* と言つてゐるもの——は、人間の物質的行動のうち「直接に織り込まれて」居り、その「直接の流出物として現はれる」。だから、人間が彼等の生活の社會的生産を爲すために生ずる生産諸關係の究明は、同時に、それらの生産諸關係に適應する經濟的意識形態の究明である。すなはち「經濟學批判および資本論の兩書とも、或る意味においては全然、資本家的社會の經濟的意識形態の研究から成る」のである。かゝる意識が現實の生産關係(すなはち人間の社會的存在)によつて生産されてゐるといふこと、かゝる意識がただ「人間の頭腦のなかへ移植され翻譯された *das Materielle* のはか何物でもない」といふこと、そこにマルクスの經濟學批判の唯物論的特徴がある。

14) Marx-Engels Archiv, Bd. I, S. 239.

15) 同上, S. 248.

私は以上の説明が極めて不十分であることを自ら知つてゐる。(なせなら、それを十分に説明するためには、吾々は資本論における個々の具體的内容に立ち入らねばならぬが、それは斯かる一小論文の範圍において到底なし得ざることであるから)。また私の表現や理解にも尙ほ十分な點があるであらうことを虞れる。だが、苟くも資本論の具體的な内容に親めるものは、私が何を言はんとしてゐるかを、私の不十分なる表現から看取せらるゝであらうと信ずる。

## 二、福本和夫氏の批評に答ふ

ところが、私のこの意見は、福本和夫氏によつて、いたく排斥された。氏は昨年(大正十五年三月の『マルクス主義』に公にされた『河上博士最近の發展』なる論文(今は氏の論文集『唯物史觀と中間派史觀』のうちに收む)において先づこれを非難し、次いで六月には、『經濟學批判の方法論』の一書を著し、その第二篇の三を『資本論の構成並に範圍について河上博士に答ふ』と題し、重ねてこれを排撃された。

私は、氏が、私の兩三年前までに公にした舊稿に對し、加へられ來つた幾多の非難を、大體において是認すると同時に、私は氏の批評によつて蒙る啓き得たことの少からざることを、氏に感謝するものである。たとひ氏の積極的な意見には往々にして賛成し兼ねる點があるとしても、氏

がその批判の對象とされた私の舊稿のものに甚しい謬見が包藏されてゐたことは、私自身現に認めてゐるところであり、私は機を見てその全部につき自己清算をしやうと思つてゐるところである。だが、昨年一月以來公にした一二の短篇に對し、依然として氏の加へられつゝある非難には、私はまだ承服することが出来ない。むしろ私は私を非難せらるゝ氏の見解のうちに、或る重大なる誤謬の伏在することを認める。當面の問題についてもさうである。以下私は氏の非難に答ふると同時に、これによつて、前に言ひ足りなかつた點を補つて行くであらう。

先づ第一の論文『河上博士最近の發展』を見るに、氏は次の如く言つてゐられる。

『今、博士の右の論文（昨年一月發行の本誌に掲載せしもの）の内包するところの問題は、これを二段に分つて考へることが出来るやうに見える。

『こゝで博士は「社會的意識形態」に對し、新たな文義的解釋を試みることによつて、所謂社會の構成に並に變革の過程に關する新たな見解に到達せられてゐる。これが第一段の問題である。

『そして博士は、この新たな見解を以て、直ちに、資本論の構成、範圍に關する私見の駁撃に向はれてゐる。これが第二の問題である。

『この第二段の問題についての博士の駁論は、私見によれば、結局、まことに虚構と誤謬の混淆

以外の何物でもない。私は近くこの點をば、拙稿『經濟學批判の方法論』に於て詳細に論評し答辯するであらう。従つて、こゝでは暫く、第一段の問題をのみ問題とするに止めるであらう<sup>1)</sup>。そこで問題は二つに分れるやうに見えるが、茲には氏の第一論文を吟味するに止めるであらう。

氏は先づいふ、『私達は、博士のこの最近の發展(?)を通して、次のことがらを確認せずにはゐられない。第一に——博士の出發點は依然として、博士の所謂唯物史觀の公式であり、従つてまた、その論究法は依然として(公式の)文義的解釋である。第二に——永く觀念論と史的唯物論との間に彷徨せられたる博士、今や完全に、經驗批判論者として所謂「哲學上の中間黨派」を形成せらるゝに至つた。第三に——博士の日和見主義、プチブルジョアの傾向は、博士が、今やこゝに、無産者階級よりプロレタリア經濟學の根柢を抹殺し去らるゝことによつて成就せらるゝに至つた<sup>2)</sup>。』

私は次に、氏が確認せずにはゐられなかつた右の三點を、順次吟味するであらう。

第一の點に關する氏の記述は極めて簡單である。氏は先づ私の論文から、『私が今この論文において主たる問題とせんとするところは、以上の一句にいふところの「社會的意識形態」とは何で

1) 『唯物史觀と中間派史觀』136頁

2) 同上, 127, 128頁

あるかといふ點にある』との一句を引用して、『これが博士の新たな社會構成論の出發點である』と言はれてゐる。ただそれだけである。次に氏はやはり私の論文から、『問題は、公式の前に出てゐる「社會的意識形態」と、その後に出てゐる「觀念的形態」との關係如何といふ點に横たはる』との一句を引用して、『これが博士の新たな社會變革論の出發點である』と言はれてゐる。ただそれだけである。さうして其の次ぎに、『公式化論者の解釋法の中心は必然に所謂文義的解釋である』と言つて、更に私の文章の一節を引用し、かくて『所謂唯物史觀の公式化、公式の文義的解釋の誤謬については、私の強く排斥する所であり、他の機會において既に屢々論究した所であるから、こゝには立入らないでおく』といふ結語を以て、この第一段を終へて居られる。

第一段はただそれだけである。それについて私は多く言ふの必要を認めない。マルクスの唯物史觀をただ公式の文義的解釋のみから理解しやうとすることは、もちろん誤謬であるに相違ない。だが、それかと言つて、公式の或る文句の文義的解釋をしてならぬといふことはない。殊に意識形態に關するマルクスの見解を精確に把握するためには、彼れの用ひた術語の意義を明かにすることが肝要である。それはホルシヒが Zur theoretischen Wiederherstellung der wirklichen Konsequenzen des dialektisch-materialistischen Princips für die Auffassung der geistigen Wirklichkeiten sind zunächst einige vorwiegend terminologische Feststellungen erforderlich. <sup>3)</sup> といふ通りだ

ある。さうして私が先きの論文において主たる問題としたのは、社會的意識形態といふ術語の確定である。それは福本氏が引用せられた拙稿中の一句——「私が今この論文において主たる問題とせんとするところは、以上の一句（唯物史觀の公式中の一句）にいふところの「社會的意識形態」とは何であるか、といふ點にある」——が、明示してゐる通りである。それが私の問題としたところなのだ。しかるに、氏は、この一句を引用して、「これが博士の新たな社會構成論の出發點である」と言はれる。何故か、る問題を提出したことが、私の新たな社會構成論の出發點になるのか？ 氏は何故さう「確認せずにはゐられない」のか？ ただ斷定しただけで、何等の理由も示されてゐないのだから、議論のしやうもない。私は Herr Proudhon beweist es, indem er es behauptet といふマルクスの句を思ひ出さしめられるだけだ。氏はまた、私が唯物史觀の公式中にある「意識形態」と「觀念的形態」との區別を問題としたことを提へて、「これが博士の新たな社會變革論の出發點である」と斷定して居られる。しかし Herr Fukumoto beweist es, indem er es behauptet! もちろん私は福本氏に「社會の構成Ⅱ並に變革の過程」といふ著書のあることを知つてゐる。だが、如何に氏が熱心にさういふ問題を考へてゐられるにしても、他人の書いたものまでが皆な「社會構成論の出發點」や「社會變革論の出發點」やに見えては、困つたものだ。何れにしても、今度の論文の第一段では、福本氏の得意とせらるゝ方法論の方面から同じ問題を

取扱つておいたから、今度は幸にして、文義的解釋云々の非難だけは免れ得るかも知れない。

私は第二段に移らう。それは私が先きの論文によつて「經驗批判論者として」「哲學上の中間黨派」を形成するに至つたといふ問題である。私は生來、中間黨とか口和見主義とかいふものを好まない。だが、事實さういふ立場に立つてゐるのなら、何と言はれても致方がない。ごまかく、何故私は、福本氏の眼に經驗批判論者と見えるか、その理由を聽いて見やう。氏は、私の次の言葉——「かくて私の見るどころによれば、現實の土臺たる社會の經濟的構造の研究は、同時に社會的意識形態の或る主なるもの、研究となる。前者の研究は即ち後者の研究である。」——を引用した後、これに對して次の如き判斷を與へて居られる。「上の如きが正に、博士が一九二六年一月に於て、到達せられたる發展進化(?)の核心である。「社會の經濟的構造は、經濟的意識形態と不可分に結合してのみ存在する」。ただし、經驗批判論者によれば、「外界世界は人間の意識と不可分に結合してのみ存在する」から」。

右の一文のうち、「社會の經濟的構造は、經濟的意識形態と不可分に結合してのみ存在する」なる一句(傍點は原文のまま)は、引用符を附せられてゐるために(それは他の若干の場所においても、同じく引用符のもとに繰り返されてゐる)、それは私の文章からの引用句であると、多くの讀者

4) 『唯物史觀と中間派史觀』145, 146頁

5) 同上, 151頁, 156頁

は思はれるであらう。現に私自身も、何處でそんなことを書いたのか知らと思つて、一應は舊稿を調べて見たが、私の輕忽からか、私はまだ斯様な句を（或はそれに類似の句をも）私の文章のうちに見ることが出来ない。少くとも私は舊稿において、さういふことを主張してゐるのではない。『社會的經濟的構造は、經濟的意識形態と不可分に結合してのみ存在する』といふ命題と、『經濟的意識形態は、社會的經濟的構造と分離し得べからざる連絡を有つ』といふ命題とが、同一でないことは説明するまでもあるまい。例へば、精神作用は物質と分離し得べからざる連絡を有つといふこと、物質は精神作用と不可分に結合してのみ存在するといふこと、は、全く別々の命題であらう。それを置き換へられては困る。密輸入は學問上の論争の舞臺においても禁制でなければならぬ。

いづれにしても、私は、私の主張してゐないことを主張してゐるらしく假定しておいて、だからそれは經驗批判論だ、經驗批判論だからそれは間違だ、とただ決めつけられただけでは、仰せ御尤だと承服するわけに行かぬのは勿論、相手になつて議論のしやうもない。

そこで第三段に移らう。それは、私が日和見主義者として『無産者階級よりプロレタリア經濟學の根柢を抹殺し去つた』といふことである。それは何故か？ 私はその説明として次の如き氏

の言葉を見出す。

『博士の所論はかうだ。第一——「經濟的構造は、經濟的意識と不可分に結合してのみ存在するものである」。故に、二者の間には、つひに何等の矛盾も生ずべき理がない。見よ！「資本」に對する博士の認識は、次の程度に止まつてゐるではないか。（この次ぎ一頁分は私の論文からの引用だから、茲には省略する。——河上。すなはち、博士は「資本なる意識形態」そのものが、資本家社會の下に於ても、その經濟的構造の矛盾の發展の一定段階に於ては、必然にまた、相對抗した形態——有産者的並に無産者的形態——に分裂するものなることを認識せられない。（中略）從つて資本家的經濟構造の下に於ては、資本なる意識形態の無産者的形態——即ち無産者經濟學——マルクスの「資本論——一名經濟學批判」は發生するに由なきことゝなつてしまふ。かくて、無産者階級がその解放のために先づ戦ひごらなければならぬ所の無産者的意識形態のうちから、しかも、その基本的形態たる無産者的な經濟意識形態は、博士にありては、除外されてしまふのである。されば、眞に「マルクス一生の著作の主要眼目を全く埋没し去るもの」とは博士その人でなければならぬ。

『第二に——博士は博士の右の見解を裏付けるために、マルクスの所謂「觀念的形態」の文義的解釋をもつてせられてゐる。云々』<sup>7)</sup>（傍點は原文のまゝ）

これで見ると、氏は、私を以て、意識の分裂を否認するものと解されてゐるやうだ。さればこそ、氏は、私の先きの論文を以て、日和見主義者としての中間黨派哲學を形成したものとされるのでもあらうか。

私はこれに答へていふ。氏は「經濟的意識形態」と、「經濟學的意識形態」とを、全く混同してゐられる。また生産力と生産關係との調和が保たれてゐる時代の統一的な（マルクスの言葉でいへば、「社會的に妥當を、即ち客觀的な」意識形態と、生産關係が生産力の發展の桎梏に轉化せる時代に分裂する觀念形態との本質的差異を、全く看過してゐられる。私は次にそのことを説明するであらう。

最も分り易い一例を挙げれば、「資本家社會の表面には、労働者の賃金が、労働の價格として、一定分量の労働に支拂はれる一定分量の貨幣として、現はれる」<sup>8)</sup>。だから、その表面的な現象形態に應じて、「労働の價值」といふやうな經濟的意識形態が生ずる。これは、マルクスの言葉によれば、資本家社會における *gesellschaftlich gültige, also objektive Gedankenformen* である。これと異り、かゝる現象形態の根底に横たはる本質を明かにすることによつて把握されたる「労働の價值」なる概念は、經濟學的な意識形態である。更に他の例を挙げれば、利潤は *vorwissen-schaftlich* な意識形態であり、剩餘價值は學的意識の形態である。固定資本、流動資本の區別は

8) Kapital, I, S. 471.

「生産當事者の通例の意識」に存するが、不變資本、可變資本の區別は、マルクス學における學的意識の形態に屬する。さうして、かゝる學的な意識によると、それは勿論、階級闘争が脅迫的な姿を以て社會の表面に現はれるやうになつた瞬間から、言ひ換ふれば、現存の生産關係が生産力の發展に對する桎梏となつた瞬間から、分裂を始めるのである。<sup>\*</sup>（それ以前に成立し得る學的意識の限界については、これを他日の論述に譲る）。だが、かゝる分裂は、決して自然成長的なものではない。意識の分裂といふことに囚はれて、階級社會ではいつでも意識が階級的に分裂してゐるものゝやうに早や飲み込みをしたならば、それは大きな間違である。労働者階級に學的な意識が自然に成長し、それが自然に有産者階級の學的意識と對抗するやうになるのではない。労働者階級においても、自然的に成長する意識は、*ordinaire Vorstellung* であり、*Bürgervorstellung* である。事物の本質にでなく、その現象形態に *entsprechen* して、かゝる常識的な *Vorstellungen* が必然的に發生するのである。それは、人間が彼等の生活の社會的生產において、彼等の意志から獨立した生産關係を、與へられたものとして受取ると同様に、與へられたものとして受取る (*vorwissen gehen* する) のである。さうしてそれを私は經濟的意識形態といふのであり、且つ斯かる *vorwissenschaftliche Vorstellungen* ならば、階級別の如何を問はざるは勿論、老人でも子供でも、男子でも女子でも、苟くも一定の生産關係のもとに生活する以上、皆な一樣にこれを有つのであり、それが

\* *vorwissenschaftlich* な *Vorstellung* の分裂については之を後日の機會に譲る

即ちマルクスの謂ふところの、『社會の經濟的構造に entsprechen やさういふの Bestimmte gesellschaftliche Bewusstseinsformen または gesellschaftlich gültige, also objektive Gedankenformen に外ならぬ、といふのである。かゝる經濟的意識形態——これらの Vorstellungen——を Begriffe に verarbeiten することは、吾等の日常生活の仕事ではなく、それは意識的に意識自體を整理するところの科學の任務であり、マルクスの經濟學批判は即ちそのことを仕遂げたのである。さうして、勞働者がかゝる科學的理論の影響によつて、『商品生産の關係内に囚はれてゐる者』たることを止めるならば、その瞬間から、彼は彼れの常識を學的意識に置き換へるのであるが、しかしそれは、賃勞働者としての資格においてはなく、一個の科學者としての資格においてするのである。彼は斯くすることにおいて、有産者とその學的意識を異にし得るのであり、そこにマルクスの謂ゆる ideologische Formen の分裂があり得るのである。

言ふまでもなく、かゝる學的意識は、本質的に、ordinaire Vorstellung と異なる。さうしてそれを區別するところに、マルクスの用意深き術語の使ひ分けがある。私は先きに斯かる學的意識の分裂は、階級闘争が社會の表面に脅迫的な姿を以て現はるるに至つてから——すなはち生産關係が生産力の發展形式からその極端に轉化するに至つてから——後のことであることを述べたが、さうなれば、社會はすでに社會的革命的時代に入つたのである。Es tritt dann eine Epoche sozialer

Revolution とマルクスがいふのが其れだ。さうして、マルクスが直ぐそれに引き續いて述べてゐる言葉は、實に次の如きものだ。「かゝる變革の觀察に當つては、吾々は常に、自然科学的に忠實に確定せらるべき、經濟的生產條件の上になる物、質的な變革と、人間がこの矛盾を意識するに至り、且つこれを排撃せんとするところの、かの法律的、政治的、宗教的、藝術的、または哲學的、簡單にいへば、觀念的な諸形態 (ideologische Formen) とを區別しなければならぬ。何故こゝにマルクスが特に言葉を更へて、公式の冒頭にある Bewusstseinsformen なる語を用ひずして、特に ideologische Formen と言つてゐるかといへば、それは、茲に問題となる意識形態は、多かれ少かれ學的な意識形態に屬するからである。すなはち福本氏の謂ゆる「無產者的な經濟意識形態」(實は無產者的な經濟學的意識形態) は、取りも直さず、茲にマルクスのいふ「觀念的な諸形態」のうちにも屬するのである。分裂するのは其れだ。分裂するのは、經濟學的意識で、經濟的意識——すなはち常識——ではない。現に見よ、我國目下の情勢においても、常識に囚はれつゝある一切の人々は、たとひ無產者階級に屬するものといへども、皆な有產者の觀念形態を固執して敢て動かぬではないか。

分裂するのは經濟學的意識形態(すなはち political economy または moral philosophy の領域における政治的または哲學的な觀念形態)であつて、常識としての經濟的意識形態ではない。だ

から、マルクスは、意識の分裂を説く個所では、注意深くも、特にこの經濟的意識形態を除外してゐるのである。すなはち『法律的、政治的、宗教的、藝術的、または哲學的』と列擧するに當り、特に「經濟的」を脱してゐるのは、さうしなくてはならぬ理由があつてのことである。

だが、ただ漠然と階級社會では當然に意識が分裂するもの、如く考へ、従つて經濟的意識と經濟學的意識との區別さへも辨別せざる者にとつては、このマルクスの注意深き表現が、逆に、彼の文章の不備として映じ得るでもあらう。現に福本氏はいふ――

「こゝに擧げられたる諸の意識形態は、單に例示的に示されたるものと解すべきであらう。従つて、經濟的意識形態を以て特に敢て除外せられてゐるものと解すべきではないと思ふ。精密にいふならば、經濟的意識形態は必ずや茲に掲げらるべきものであつて、これを掲げてゐないのは、マルクスの不備といはるべきだと考へる。云々」(圓點は新たに私の附したるもの)

こゝに、「純經濟過程」なるものを抽象することによつて之を「下層建築」となし、「國家過程」を「上層建築その一」となし、更に「意識過程」なるものを抽象して「上層建築その二」となしつゝある、福本氏の抽象的辯證法の理解の限界が端的に暴露されてゐる。

吾々には茲で、福本氏が、窮鼠の猫をかむが如く、窮餘マルクスにかみつくことを餘儀なくされてゐるを見る。だが、かゝる勇敢さには、敬服できかねる。何故といふに、マルクスの文章

は、氏の想像される如く、左様にふしだらなものではない。マルクスが如何に些末な點に至るまで措辭に注意したかは、吾々が『經濟學批判』と、『資本論』第一版と、同じく第二版とを比較するの勞を取るだけでも、疑ふべからざる程度に證明を得得る。例へば *abstrakte menschliche Arbeit* を *abstrakt menschliche Arbeit* と改めてゐるが如きは、僅に一字のことである。なほ資本論第一版と第二版との相違については、私は嘗て本誌でその一斑を述べたが、その折も指摘しておいたやうに、マルクスは第二版の印刷を終へた後にも、更に本文の字句を若干訂正し、その訂正表を第二版の附録としてゐるのである。さうして、そのなかには、實に次のやうなものがある。

ad Kapitel X, p. 324, z. 12 von oben lies : "Der wirkliche Werth einer Waare ist aber nicht ihr individueller, sondern ihr gesellschaftlicher Werth, d. h. er wird nicht durch die Arbeitszeit gemessen, die sie im einzelnen Fall dem Producenten tatsächlich kostet, sondern durch die gesellschaftlich zu ihrer Produktion erheischte Arbeitszeit."

此の如く訂正された本文の元々の形は何うであつたかといふに、それは次の如くである。

Der wirkliche Werth einer Waare ist aber nicht durch ihren individuellen, sondern durch ihren gesellschaftlichen Werth bestimmt, d. h. nicht durch die Arbeitszeit, die.....

すなはち原文には「一の商品の現實の價値は、その個別的價値によつてでなく、その社會的價

値によつて、すなはち……の労働時間によつて、規定される (ist bestimmt durch……) 云々』とあつたのが、改められて、『一の商品の現實の價值は、その個別的價值ではなく、その社會的價值である (ist……)、すなはち其れは……の労働時間によつて測られる (wird gemessen……) 云々』とされてゐるのである。輕卒に讀過するものには、どこが改められたか、氣にも附かぬであらう。

これら僅かの例示によつても、マルクスが如何に措辭の上に細心の注意を拂つたかが分かるであらう。ところで今吾々が問題としてゐるのは、唯物史觀の公式であり、それは、マルクス自身の言葉によると、彼が經濟學研究の結果得たところの一般的結論であり、すでに之を得た後は、彼れの研究の導きの糸となつたものを、簡単に公式化したものである。私は敢てマルクスを神としやうとするのではないが、かゝる一般結論の公式化に不備があるといふ推斷には、容易に服することが出来ない。最も重要な經濟的意識形態が、つい不注意に取り落されたといふが如きは考ふべからざることである。現に福本氏は、私が、マルクスの謂ゆる觀念形態の中には經濟的意識形態が含まれてゐないといふ説を唱へたことに對し、『無産者階級がその解放のために先づ戦ひとらなければならぬ所の無産者的意識形態のうちから、しかも、その基本的形態たる無産者的な經濟意識形態は、博士にありては、除外されてしまふのである。されば、『真にマルクス一生の

著作の主要眼目を全く埋没し去るもの」とは、博士その人でなければならぬ」と非難して居られる。すなはち氏にとつても、經濟的意識形態はそれほど大切な「基本的形態」である。しかも、マルクス自身が彼れの經濟學研究の一般的結論を公式化せる際には、——氏の見解によると——文章の不備から氏の『基本的形態』を取り落したのである。しかしそれでは、マルクス自身が「眞に彼れ一生の著作の主要眼目を全く埋没し去るもの」となりはせぬか？

私の舊稿に對する福本氏の非難の第二段は、氏の言葉によると、『資本論の構成、範圍に關する私見（福本氏の見解）の駁撃』に關するもので、この點に關する河上の論述は、『結局、まことに虚構と誤謬の混淆以外の何物でもない』といふことだ。さうして此の第二段の問題は、既に述べたやうに、氏の著作『經濟學批判の方法論』中『資本論の構成並に範圍について河上博士に答ふ』なる章下に取扱はれてゐるが、それを通讀して見ると、大體は第一論文におけると同じことが再び繰り返されてゐるに過ぎない。ただ相違する點は、私が舊稿において事の序に氏の謂ゆる社會構成の過程別に言及したるに對し、若干の辯明をされて居る部分に止まる。最初私はそれにも論及するつもりであつたが、すでに豫定の紙數を超過したから、これが批評はしばらく茲に舍くとしやう。私は他日を期して、この部分における氏の誤謬をも詳細に指摘すると同時に、何が故に

斯かる誤謬が成立し得たかを説明するであらう。

因にいふ、私が本文に述べた意見は、一兩年來、或は個人的の對話において、或は研究的な會合において、しばしば他人の批評を求め來つたものであるが、未だ會て十分なる賛成を得ない。しかのみならず、かゝる意見は何人の著作からの示唆に基づいたものでもなく、全く資本論自體のうちから私自身の考へ出したものなので、最初はもちろん他人の批判を受ける積りで之を公にしたのである。しかし、ただ經驗批判論であるとか、中間黨派であるとかいふ名稱を附せられただけでは、何が故にそれが誤謬であるかを知ることが出来ない。それは相手がいくら自分の見地を唯物辯證法的だと號しても、ただそれだけでは、それが間違でなからうと信ぜられぬのと、同じである。かくて私は、未だ自説を非なりとするに至らざるのみならず、むしろ、益々自身の確信を強めるのみである。私は昨年正月に前記の舊稿を公にした後、コルシユの『マルキシズムと哲學』を讀むの機會を得たが、そのうちに計らずも自分の考と同じ考の記述されることを見て、頗る愉快に感じた。彼はいふ『マルクス、エンゲルスの Auffassung にとり非常に特徴的なものは、正にこれら資本家社會の經濟的基本觀念が、彼等によつて決して Ideologie と稱されてゐないことである』<sup>10)</sup>。『マルキシズムの辯證法的唯物的社會批判の最も重要な理論的ならびに實踐的構成分たる、かの經濟學批判が、資本家の時代の物質的生産關係の

10) Korsch, Marxismus und Philosophie, S. 56. (據本氏譯本, 131頁)  
なほ Korsch の Kernpunkt にも同じ意見が述べられてゐる (『社會科學』十一月發行『唯物史觀研究』號における本多芳郎氏の譯文参照)

批判たると全く同様に、また斯かる時代の一定の社會的意識形態の批判であることは、一般に承認された事實である』。コルシユが同じ意見を述べてゐるといふことが、私の議論の正しい何の典據になるわけでもないが、何人からも賛成を得ない時に、一人でも斯かる同論者を發見することは、私の悦びとするところである。ところで此の書の邦譯者は、その譯出が『經驗批判論者等』の『俗論を克服するに少しでも役立つならば、譯者の望は足りる』といふことを、その序言に誌して居られる。しかもそのコルシユとほぼ同じことを唱へた私は、少くとも福本氏から見れば、これによつて愈々經驗批判論者たる立場を固めたことになる。これは何ういふ譯なのであらう？